学校安全総合支援事業の取組について

―　「わたしたちのまち、松代の防災を考える　～過去から学び、未来に備える～」
小学校４年生の防災教育の実践から　―

長野市立松代小学校

1　はじめに

長野市立松代小学校は児童数 316 名、学級数 15、長野市東部にある松代地区の中心部に位置している。松代地区は、松代城を中心に広がる城下町である。

令和元年(2019 年)の台風 19 号『猪の満水』では、松代地区もかなり広い地域が浸水した。地区の東側を流れ千曲川に流れ込む神田川は、松代小学校校庭のすぐ脇で越水し町内に流れ込んだ。小学校校舎は床上浸水を免れたものの、地区の西側の蛭川も越水したため、地区内は広い範囲で床上浸水し、深いところでは２m近くもの深さまで浸水したという。

小学校４年生(学年児童数 56 名)の子どもたちは災害時には３歳程度で、多くの児童は当時の記憶があまり無いが、被害にあった家庭も多かったようである。

そこで、信州大学内山先生・廣内先生に御指導をいただきながら、一年間をかけて防災について学習していく中で、わたしたちのまち・松代の防災を考えていくことにした。

“猪の満水”（令和元年東日本台風）災害デジタルアーカイブ
https://chikuma-archive.shinshu-bousai.jp/

2　学習の概要

テーマ：「わたしたちのまち、松代の防災を考える～過去から学び、未来に備える～」

児童は以下の活動を行った

(1) 過去の災害を知る：紙芝居で令和元年台風 19 号の浸水被害を学習

ア　９月９日、復興応援実行委員の方々が作成した浸水被害の紙芝居を見せていただき、被害の実際を知った。

イ　『“猪の満水”（令和元年東日本台風）災害デジタルアーカイブ』などを使い、自分たちのまちにどのくらいの被害があったのかを知った。

ウ　松代小学校でも、子どもたちにも親しみの深い校庭脇の神田川から越水した大量の水の通り道となり、特に校庭は長い間使うことができず、自衛隊の方に整備をしていただいて使えるようになっ

たことを知った。

(2) 避難の重要性を体験：ＶＲ避難ルートを疑似体験し、避難のタイミングを理解

ア　10 月１日、国立研究法人土木研究所の傳田先生によるＶＲでの避難行動をｉＰａｄ上で体験させていただいた。

イ　若い人や高齢者の立場になった避難を疑似避難体験することにより、避難行動をできるだけ早く始めること、やみくもに行動するのではなく水についてしまう可能性のある場所を知っておくこと、そこから離れるように避難することなどを理解することができた。

(3) 地域の危険個所調査：街歩きで危険個所を“Field ON”にまとめ、防災マップを作成

ア　10 月７日、地域の方々、内山先生、信州大学の学生さんたちにも協力していただき、少人数グループで自分の通学路を中心にまち歩きをしながら、危険個所などを写真に撮り、防災マップを作成した。“Field ON”の利用。

イ　まち歩きの際には、実際に被害にあわれた方や避難誘導に携わった地域の方に直接お話をお聞きする機会となり、実際の被害をその場で詳しくお話しいただいた。

ウ　地域の地図に反映された各班が撮影してきた写真を発表し、皆で共有し合うことで、浸水の恐れや地震の倒壊の恐れのある場所をよく知っておくことが、地域の災害の被害を少なくすることにつながることを認識することができた。

(4) 家庭での防災対策：非常持ち出し袋の確認、ハザードマップを活用しての避難ルートの検討

ア　10 月中旬、各家庭での防災対策について、家族と話し合った。

イ　ハザードマップを活用して、自宅周辺の浸水リスクを把握し、避難場所を検討したり、避難ルートを確認したりした。いざという時にどのように避難をするのか、連絡手段をどうするのかなどを話し合った。

ウ　非常持ち出し袋や非常食、避難準備などの状況についても確認した。家族が３日ほど過ごせるくらいの食料はどのくらいになるのかを考え合った。

(5) マイ・タイムラインの作成：災害時の行動順序の整理

ア　10 月下旬、家庭で話し合ってきたことをもとに、災害時の行動順序を考えた。様々な災害の想定の中で、避難の準備や行動のタイミングなどを個々で考えた。

イ　それぞれの家庭の家族構成や、自宅の場所などによっても避難場所や避難行動には違いが出てくることがわかってきた。

(6) 避難時・災害時の食料の確保：袋調理の実践

ア　12 月 12 日､保護者でもあり実際に災害時に避難所開設などのボランティアに携わった方の指導の下で学習した。

イ　災害時には、食料は限られる。また、確保できている水（生活水・飲料水）にも限りがある。衛生面で普段とは違う環境であること、食器を後で洗うことが難しいなどの想定における調理を考え体験した。

ウ　袋の中でお米と水・ホットケーキミックスと水などを組み合わせたものを湯煎調理してみる体験活動をした。使用する水を極力減らし、衛生的に安全に食べられる食料確保の方法を教えていただいた。

3　学校防災アドバイザーのかかわり

(1) 学習の単元計画作成についてのアドバイス

８月７日、信州大学内山先生、廣内先生、土木研究所傳田先生に参加いただき、単元の進め方についてアドバイスをいただいた。併せて、参加いただける活動について日程調整を行った。

(2) “Field ON”設定・実践についてのアドバイス

ア　“Field ON”の細かな設定についてアドバイスをいただいた。

イ　実際に子どもたちが班行動の際に使う場合に、班の中で一人ｉＰａｄを持つ係、場所の説明メモなどを書く係などの分担をすると活動がスムーズであることなどを助言いただいた。

(3) 班別まち歩き時の協力・子どもたちの実践発表についてのアドバイス

ア　内山先生と学生数人に参加いただいた。

イ　撮ってきた写真を発表する準備の時に子どもたちのまとめに助言いただいた。

(4) その他・学校での防災訓練の在り方についてのアドバイス

ア　数年で様々な想定を体験できるようローテーションを組む防災訓練の在り方についての助言をいただいた。

イ　地震における避難行動をせずに安全確保をする訓練についての助言をいただいた。

ウ　保護者への引渡訓練の際、できるだけ普段通りにできるようにとの助言をいただいた。

4　事業の成果及び今後の課題

“Field ON”を活用することにより、地域の危険個所を地図上に表すことができ、地域の防災に係る地点を可視化共有できた。また、アーカイブサイトの地図上の写真を見返すことで、自分たちの感じた危険度を実際の浸水被害と重ねて考えることができた。アーカイブサイトのように資料を積み重ねておいていただくことは子どもたちの学習の深まりにも生きている。

『猪の満水』について学習を深めていく中で、地域の方々の協力をお願いしてきた。

地域の災害・防災についての知見のある方と学校の新たなつながりが生まれた。今後も協力していただくことは非常に心強い。

本年度、本校は文武学校の創立から歴史をつなぎ 170 周年を迎えた。その記念式典では、それぞれの学年が松代地域について学習してきたことを発表する機会があり、４学年では、防災学習で学んできたことを発表することができた。その発表の機会があるということが、学習をより深めることにつながった。また、防災学習について保護者の皆さんをはじめ、地域の方々に向けて広く発表することにより、発表を聞いてくださった皆さんに、いつもの生活の中で防災について意識していただく機会となったことと思われる。そのことは、学習を続けてきた４学年児童の防災意識の高まりだけでなく、地域全体の更なる防災意識の高まりとなっているのではないかと感じる。防災を子どもたちが学習するだけでなく、積極的に地域に発信していくことが地域の防災意識の向上を図ることにつながり、大切な視点であると思う。

5　まとめ

『猪の満水』という大きな災害が地域で起きたこともあり、災害を実際に経験した家庭も多く、地域で被害にあわれた家庭も多いことから、学習の生きた材料が多い地域である。また、その災害から復興するために立ち上がった復興応援実行委員会など、いくつものボランティア団体の活動も数年経った今でも活発であり続け、防災意識の高い地区であることもあり、学習を実践するにあたり快く協力してくださる地域の方々が多く、非常に深い学習をすることができた。

袋調理の実習の時には、ペットボトルの水を多く確保できていたグループが、水が足りなくなりそうな隣のグループに提供する姿があった。もらったグループは感謝の意を伝え、提供したグループも恩を着せるわけでもなく、両者とも普段の生活とは違い、災害時にどのように動けるのかが表れた姿が見られた。災害時の自助・共助を具現できた姿ではないかと感じている。このような活動を続けていくことにより「自分の命は自分で守る」だけでなく、「みんなで助け合う」へと昇華していけるのではないかと考える。

小学校４年生では、社会科や国語科の時間に防災について考える単元があるので、それらと絡めながら防災学習を進めることが可能である。毎年継続して、４学年が松代の防災について学習するということになれば、将来的に更に防災意識の高い地域を形成できるのではないかと考えている。

（文責　安全防災教育主任・４学年主任　　布谷　孝浩）

学校安全総合支援事業の取組について

―　川中島小学校の防災管理・防災教育の充実に向けて　―

長野市立川中島小学校

１　はじめに

長野市立川中島小学校は、武田信玄と上杉謙信の有名な「川中島の合戦」の舞台となった「川中島」に位置している。

この地域は、鎌倉時代から犀川の氾濫と闘いながら、肥沃な土壌と豊富な水を利用して農業が営まれてきた。江戸時代初期には治水工事や用水路の整備、開拓が進められ、「川中島の穀倉地帯」と呼ばれるほどになった。

本校は、1869 年に創立された郷学「日新館」を前身とし、長野県で最も古く、全国でも２番目に長い歴史を持つ学校である。古くから農業が盛んな地で、学校の周辺にも江戸時代初期に松代藩城代の花井吉成父子が開削したものと伝承されている堰を間近に見ることができる。また、現在も、米や麦、地域の特産品でもある桃作りが盛んであり、子どもたちも桃作りや米作りを体験しながら水の大切さについて学んでいる。

２　長野市立川中島小学校の防災体制について（概要）

本校では、児童一人一人が生命尊重の意義に触れながら、日常生活を安全に営むための知識・習慣とともに、災害時や不審者と遭遇した場合に危険を回避する対応力を身につけることを目指し以下のような防災教育を行なっている。

(1) 避難訓練（防災避難訓練・集団下校訓練）
(2) 防災聞き取り訓練（放送を黙って聞き、避難集合場所へ集合する）
(3) 緊急時引渡し訓練（保護者への啓発）
(4) 地区子ども会（登下校の安全確認、集団下校訓練）

３　学校防災アドバイザーの関わり

本校では、教科や総合的な学習の時間等で地域の特徴や特産品について知る中で、地域の豊かさが、豊かな水資源と関わっていることを学んできた。

また、災害や防災について学習を進める中で、日本各地で頻発する地震や水害等災害を目の当たりにし、その怖さを感じる一方、災害を自分ごとと捉えられないでいた。

６年１組では、これらの学びの過程の中で、令和６年１月の能登半島地震、そして、９月の能登半島豪雨で被災した輪島市の児童から当時の体験を聞く機会を得ることができた。避難所での体験を通して感じた悲しみや不安、必要だった物品、体験から得た平時の備えの大切さなどを教えてもらい、改めて自分の地域の特徴や防災対策について目を向ける必要性を感じ、学校防災アドバイザー事業を活用させていただくこととした。

(1) 「フィールドオン」の導入

9月29日（月）、学校防災アドバイザーの指導のもと、児童タブレット端末でのアプリ「フィールドオン」の使い方及び、フィールドワークでもアプリを活用できるよう下準備を行なった。

自分が生活し、登下校する身近な地域の危険箇所や安全な場所を調べていくことへの期待感を持つことができた。

(2) フィールドワークの計画を立てよう

アプリ導入後、登下校や生活圏が近い地区ごとにグループを作り、フィールドワークの計画を立てた。事前に学校防災アドバイザーに相談したところ、「フィールドワークの手本」を記したスライドを提供していただいた。身近な地域の地震災害や水害の危険性について再度学習し、スライドを参考に、調査すべきポイントを考えていった。その中で、「地震の際、崩れやすい場所や倒れやすい場所がないか調べるとよいのではないか」、「水害の際、水が溢れやすい場所や水に浸かりやすい場所を見つけていけばよいのではないか」と見通しを持つことができた。その後、グループに分かれて、通学路や自分たちの家の周りの危険箇所を想像しながら、調査する場所やルートを自分たちで決めていった。

(3) フィールドワークへのサポート

10月20日（月）、学校防災アドバイザーの皆さんにサポートいただき、「川中島の防災マスターになろう」と題し、フィールドワークを行った。

地震や水害の時に危険な場所や安全な場所、役に立ちそうなものなど調査の視点を確認し、グループに分かれ調査にでかけた。グループごとに、発見したことを「フィールドオン」に、写真で記録し、気づいたことをタブレットのメモに書き込んでいった。

古くからの住宅地を調査したグループは、通学路の両側が２メートルほどのブロック塀に挟まれていることや、土壁の家屋の壁が剥がれていることに気づき、地震がもし登下校時に発生したら、ブロック塀が倒れてくるのではないか、また、６年生として下級生と安全に避難できるか不安を感じていた。別のグループでは、学校防災アドバイザーから普

段何気なく登下校している道にも傾斜があり、水のたまりやすい場所があることを教えていただき、水害時の危険箇所に気づくことができた。また、教室で学んだアンダーパスのように、大雨の際、車での移動で危険な場所も、実際目で見て確かめることができた。安全な場所についても、近くの公園や公民館だけでなく、広場や駐車場など、地震発生時に利用できそうな場所を子どもたち自ら考えていた。

フィールドワーク後、それぞれのグループで発見したことを共有した。川中島地区共通の課題をどう伝えていったら良いか新たな願いを持つこともできた。学校防災アドバイザーからは、自分の地域の危険箇所や安全を守るための工夫を知り、自分の身は自分で守ることが大切であることをお話しいただき、気持ちを新たにするとともに、自分たちができることは何か、再考することにつながった。

４　事業の成果及び今後の課題

能登半島地震について詳しく調べ、避難所で生活することの大変さを提示してくれる子、川中島地区の自主防災訓練に参加し、もしもの時の備えの大切さについて提示してくれる子など、災害に対しての意識を高めた様子が見られた。防災、減災についての個々の学びを学級全体に広げ、深めていくことがこの事業を活用させていただいた目的の一つである。

今後、川中島地区でも想定される災害予測や災害から命を守るための防災、減災について自助、共助、公助の視点から学んできたことをテーマグループごとにまとめていく。いかに、仲間や下級生、保護者、地域の皆さんに伝え、防災意識を学校、地域全体で高めていけるようにしていけるかが課題である。

５　まとめ

大きな災害を実感したことのない子どもたちにとって、災害の実情を捉え、防災、減災への意識を高めることは、簡単なことではない。しかし、実際に災害を体験した同年代の子どもたちと交流したり、自分たちなりに体験したりすることで、身近な地域の危険を知りどう対処すべきかについて児童自らが考えることにつながった。

信州大学　廣内大助先生、研究室のみなさんには、実践事例の紹介、「フィールドオン」の効果的な利用、フィールドワークへのサポート等多面から御協力いただいた。今後も関係機関との連携を図りながら防災管理、防災教育の充実に向け取り組んでいきたい。

（文責　教諭　林　めぐみ）

学校安全総合支援事業の取組について

－常に災害の実際を想像しながら、
防災学習に新たな課題を見出していく営み－

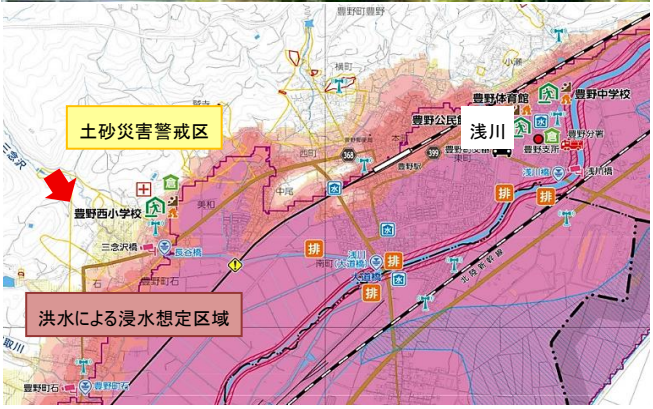
長野市立豊野西小学校

1　はじめに

本校は長野市北部に位置する全校児童 300 名の中規模校である。付近には千曲川・浅川が流れており、長野盆地西縁断層の動きにより形成された緩やかな豊野丘陵上に校舎が建っている。令和元年台風19号の際は、浅川流域の氾濫原にあたる学区内の地域が甚大な浸水被害を受け、本校の体育館をはじめとした避難所等で多くの被災者が避難生活を送った。今年度６年生の児童の書いた卒業文集には当時の避難生活に言及しているものが仄見える。

「ゆたかの」と呼ばれる豊野は鳥居川より引かれる石村用水が流れ、入川・隈取川・三念沢・権現沢をはじめとした多くの川や沢が流れる水の恩恵を受けている土地である。同時に、学校周辺は土砂災害警戒区域にあたる箇所が多く、土石流や地滑りに対する備えも必要とされている地区でもある。

豊野丘陵に建つ豊野西小学校



長野市洪水ハザードマップ（北部１）より抜粋

2　長野市立豊野西小学校の防災体制の取組

学校防災アドバイザーである信州大学教育学部 廣内大助先生・内山琴絵先生に御指導いただき、豊野地区三校（豊野中学校・豊野東小学校、豊野西小学校）で連携しながら、防災教育の改善を図っている。児童が安全に気を付けて生活できる態度を養い、応急の場合にも迅速な判断をし、安全に行動したり避難したりできる態度を養うことを目指して、年３回の避難訓練や職員研修等の実践を重ねている。豊野三校連携教務主任会を中心にして検討・立案して行われた「豊野三校合同引渡し訓練」、共通教材を用いた「防災教育カリキュラム」による防災タイムラインの作成・見直しなどの実践を重ねている。

3　本年度の取組について

(1) 課題を明確にして防災教育活動を推進するための、学校防災アドバイザーとの懇談

ア　期日　８月５日（火）　14:00～16:00

イ　ねらい

・本校のこれまでの取組の成果と課題について共通の基盤に立ち、年度後半の防災育活動を推進できるようにする。特に、災害の実際を想像しながら、訓練活動を含めた防災教育・職員研修が充実したものになるよう御指導をいただく機会とした。

引渡し訓練の様子

ウ　参加者

・本校職員（校長、教頭、教務主任_防災教育主任）３名

・長野市教育委員会 地域連携推進ディレクター１名

・支援者　信州大学教育学部社会科学教育助教（学校防災アドバイザー）内山 琴絵 先生

簡素で明快な表示を工夫することで、教師の人員を必要以上にかけずに、送迎に来校した保護者の動線を確かなものにする取組

エ　懇談内容

〇教務主任より今年度の変更点の説明

・避難所の開設、初期運営について職員研修で想定訓練を行うこと。

・保護者通知は、前年度より回数を減らして夏休み前１回にすること。

・合同引渡し訓練の時間設定をよりタイトにすること。

〇避難所開設の動きについての御指導

・本来は行政・地域住民で行うことであり、教師は本来の職務（※学校としての優先事項）を行うのが原則だが、令和元年台風災害の際は可能な限り協力した経緯がある。※（１：校内の点検　２：重要書類の運び上げ　３：連絡体制の確立）

・宮下孝茂元校長先生のアーカイブ動画を「猪の満水　災害デジタルアーカイブ」で視聴する機会をとることはよい研修になる。また丑澤現校長先生が長沼小学校に在籍していた当時のインタビュー動画もある。

・長野市教育委員会から開錠依頼が来た場合は協力をお願いしたい。そうした時のために、校舎の使用範囲を決めておくのがよい。避難所設営は基本的には体育館だけだが「ここは入ってはダメ」を伝える立入禁止の表示が欲しい。

・本校が指定避難所になるのは土砂災害と地震による災害発生時だが、洪水の際にも十分に避難所になる可能性がある。指定されていなくても人は来ることは考えられる。

〇今後の防災教育のあり方についての御指導

・水害の歴史を被災経験のある児童にどう伝えていくか。学ぶことに抵抗があるのかどうかを見計らっていく。

・来年度以降は、「Field ON!」を使ったマップ作りや、そうした学習教材を使った発信の力を養っていくことに力点を置いたらどうか。

(2) 豊野三校引渡し訓練

ア　期日　８月 29 日（金）　15:00～16:00

イ　ねらい

・水害等の緊急時における児童生徒の保護者への確実な引渡しを行う。令和元年度の台風 19 号と同程度、初期段階での避難、車等の通行も可能な場面を想定した訓練

を行う。

ウ　訓練内容

・児童の保護者への引渡しを行い、児童はそのまま下校する。

・「緊急時の児童引渡しカード」に記載のない方への引渡しはしない。避難先について各御家庭で検討する。保護者は実際の災害を想定し、当日の引渡し時に、予定の避難先を担任に知らせる。

エ　当日の反省といただいた御指導

・来校した保護者の動線確保をより少ない職員の人員で行う工夫を継続する。

・引渡し訓練後、係ごとに分かれて避難所開設に伴う準備活動についてシミュレーションを行った。事前の懇談内容をもとに、必要な部屋に「立ち入り禁止」を表示するなど、学校としてできる具体の活動を実行したことはよかった。

・車の行き来について、地域住民の方とトラブルが発生したり、校庭の駐車に関わる人的配備が思いの外必要であったりした事案から、実際の混雑ぶりや起こりうる混乱について想定し、今後の訓練に生かすことを御指導いただいた。

(3) 学校防災アドバイザーによる授業

ア　期日　11 月 20 日（木）　　５年生（１校時　8:35～9:20)、
　　３年生（２校時　9:25～10:10)

イ　ねらい

・学区内の危険箇所を探して歩き、「Field ON!」を活用して気付いたことを発表し合うことを通して、身近な地域の危険箇所マップを作り、防災への意識を高めることができる。

ウ　授業の実際

・家庭学習で事前に撮影した学区内の危険箇所を基に、「Field ON!」を使って気付いたことを発表し合うことを通して、身近な地域の危険箇所マップを作り、防災への意識を高めることができた。写真データについては、(保護者にも協力を得ながら）事前に家庭学習で児童が撮影をした、危険が想定される箇所の写真を使用した。

・児童は、自分たちが生活する身近な地域の中にさまざまな危険が想定されることに気付いた。「いつもは普通に暮らしていたけれど、これからはもし災害が起こったらどうするのか、よく考えて生活するようにしたい。」という感想を残す児童がいた。

授業の実際

・「Field ON!」を使うことで、一人一人が自宅周辺で撮影した写真が、１枚の地図上に位置情報とともに表示され、全員で共有することができる。授業では、まず地区ごとに分かれて写真を見せ合い、自分の家の近くにどんな危険が潜んでいるのか、地震が起きたときに安全な場所はどこかを話し合った。その後、学年全体で写真を紹介し合いながら、「普段は何気なく通り過ぎている場所にも、地震が起きた時には思わぬ危険につながるポイントがある」ことに気付く姿が見られた。子どもたちからは、「道が狭くて、両端の家の塀が倒れてくるかも」「畑に置いてある支柱も倒れたら危険だ」など、具体的な気付きが多く出され、日常を防災の視点で見直す大切さを実感している様子があった。

・内山先生からは、豊野地区には活断層が通っていること、その活断層によって土地が盛り上がっている場所があることなど、地域の地形や特徴についてもお話しいただいた。自分たちが暮らす地域を知ることで、もしもの時に備える意識が一層高まり、学習の意義をより実感できる時間となった。今回の防災学習を通して、子どもたちは「自分の住む地域を知ることは、命を守る行動につながる」という大切な学びを得ることができた。

(4) 学校防災アドバイザーの指導に基づく職員研修

ア　期日　10 月 17 日（金）　15:45～16:50

イ　ねらい

・学校防災アドバイザーと連携し、防災管理・防災教育の両面から、危機意識をもち続け、より実効性のある教育活動を推進していくために、係・管理職との懇談のみならず、校内の教職員が授業改善に役立てていけるようにする。

ウ　研修内容

・「“猪の満水”（令和元年東日本台風）災害デジタルアーカイブ」の「長野市立豊野西小学校校長先生（当時）_２.避難所運営（10 月 13 日早朝～）」の箇所を視聴。

・防災倉庫の見学（収納されている内容物品の把握）。

職員研修の実際
（防災倉庫の見学・動画資料の視聴）

・職員向けに「勤務時間中の災害発生時対応に関する事前確認アンケート」「災害時学校滞在可能時間等に関する事前確認アンケート」の実施。前者は「勤務時間内に大規模災害が発生し、学校が避難所となる、または児童の保護が必要となった場合の、初期対応体制と職員の継続的な協力可能時間を事前に把握すること」を目的とした。また後者は、「大規模災害発生時における学校の初動体制（児童の安全確保、避難所運営補助など）を事前に検討するため、各職員の災害発生時の状況や学校への参集・滞在に関する意向を確認すること」を目的とした。こうした職員研修を行うことで一人一人が、災害の現場を自分の生活の視点から具体的に思い描けるようになった。

4　まとめ

本校の防災教育の体制や内容について御指導をいただきながら、児童・教師が、防災の角度から地域や自分の生活を俯瞰する視点を与えていただいている。そうした視点には過去の災害事象と地道な防災活動の蓄積から生まれてきていることを教えていただき、児童にとっては、防災学習に自分ごととして取り組める足掛かりとなっている。経年の御指導の下、本校の防災教育に位置付いてきている知見が多くなってきている。災害の現場にあって対応を迫られる数多の事案の中では、教師の数もそこで実際できることも限られる。その中でどのように人の動線を確保し、安全を保つことができるか、想像を働かせながら日々の防災教育に臨むこと、職員の研修を積み重ねていくことが肝要になる。今年度も随所で御指導をいただき、また教師間でも話題に上せてきた「常に災害の実際を想像しながら、防災学習に新たな課題を見出していく営み」を今後も積み重ねていきたい。本校の安全教育がまた新たなフェーズに入りつつあることを感じながら、今後も地域との連携を深めるとともに本校の防災体制をより充実したものにしていきたい。

（文責　教頭　目黒　哲朗）

豊野東小学校における防災教育の充実に向けた取組について

―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業を生かして　―

長野市立豊野東小学校

１　はじめに

本校は長野市北部に位置する全校児童 120 名の小規模校である。近隣には千曲川、鳥居川、浅川が流れており、令和元年 10 月の台風 19 号による千曲川の氾濫の際は、学区内で床上・床下浸水の被害を受けた家庭があった。本校体育館は避難所となり、多くの被災者が２か月ほど避難生活を送ることとなった。

このような本校の立地からも防災教育の充実が必須であると考え、「学校安全総合支援事業」を中核とした教育課程の改善を図っている。今年度も、豊野地区３校（豊野中学校、豊野西小学校、本校）の連携を重視して防災教育に取り組んできた。

２　豊野東小学校の防災体制と昨年度までの取組概要

「児童が自らを災害から積極的に守るため、災害に対する理解を深め、望ましい態度や習慣を身につける」ことをねらいとして防災体制を整えている。火災、地震、風水害等の災害の危険から児童を安全に避難させるために、地震や火災を想定した避難訓練のほか、大雨のため近隣の川の水位が上昇し、危険が迫っていることを想定した引渡し訓練を豊野地区３校で連携して実施した。

また、令和元年台風 19 号による災害を教訓とし、令和４年度より学校防災アドバイザー（信州大学 本間喜子先生）の御指導を受け、自分の住んでいる地域にどのような危険があるか知り、災害に備える大切さを学ぶことをねらいとして、高学年児童一人一人の防災タイムライン作成や、職員研修、地域と連携して引渡し訓練を実施し、児童や職員の防災の知識・理解・技能の向上を図ってきた。

被災当時のことが風化されていく中で、児童や職員、保護者の防災意識を持続させていくことや、さらに、地域との連携に踏み込んだ防災体制の構築ということが課題として残された。

３　学校防災アドバイザーの関わり

学校防災アドバイザーである信州大学の本間喜子先生と連絡を取り合い、今年度の防災教育の推進について打ち合わせ、以下のことをお願いした。

・３校合同引渡し訓練への参加と事後指導
・高学年児童への授業の実施
・職員研修の講師依頼

(1) 引渡し訓練

３校合同引渡し訓練に合わせて来校いただき、訓練開始前から終了後まで参観いただいた後、以下のような事後指導をいただいた。

・子どもたちは混乱することなく、コミュニケーションをとりながらしっかり待つことができた。リラックスして待てることを考えたい。
・実際は、大人が緊張することで、子どもたちは不安になる。「訓練でやったように待ちましょう。」「訓練のときと同じ状態で大丈夫だよ。」と声をかけ、安心させたい。
◎安全な時に対策しておくことが強みとなる。有事でない時に訓練しておくことで、自然に体が動けるようになる。訓練を重ねながらブラッシュアップしていきたい。

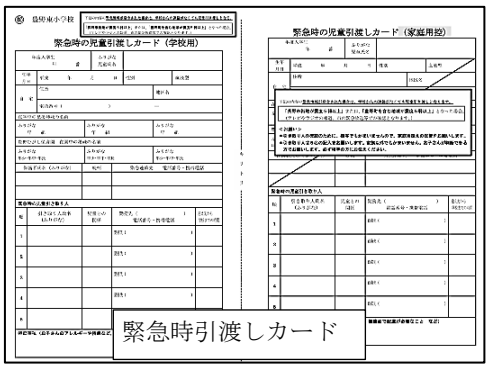
保護者へ伝えたいこと
・実際は、職場から来る方も多い。「自宅～学校」「職場～学校」のハザードマップの確認を呼びかけたい。
・先生方も通勤路のハザードマップの確認をしておきたい。
・名簿にない方が迎えに来た時の確認が適切にできていた。迎えに来る可能性のある人はすべて引渡し名簿に書いていただくようにしたい。引渡しは確実に行いたい。

・避難所開設となったときの情報把握と外部との連絡は大変な状況（学校の電話はパンク状態など）になることを知って準備をしておけるとよい。

昨年度の御指導から、年度当初に保護者に書いていただく「緊急時引渡しカード」の記載内容を見直し、引き渡す人の欄を５人に増やし、迎えの可能性がある方をできるだけたくさん挙げていただくようにした。また、迎え先からのおよその所要時間の記入をお願いするなど、有事の際の混乱をできるだけ避けることができるように準備を進めた。今後は、職場や自宅から学校までの経路についてハザードマップを確認し、防災意識を高めていただくための呼びかけを行いたい。

保護者への引渡し

また、学校周辺に駐車していた迎えの車について御指摘があったため、今年度は、駐車禁止の表示を準備し、保護者への啓発を強化した。学校は避難所となる可能性もあり、細い道路での駐車は渋滞等の混乱を招くため、引き続き協力を求めていきたい。


緊急時引渡しカード

さらに、今年度は、引渡し終了と同時に、避難所開設の準備として係活動の時間を位置づけた。初めての試みであったため、実際にどのような動きになるのか、それぞれの係が役割についてイメージする貴重な機会となった。

引渡し訓練当日の朝は、全校集会を行い、令和元年の台風 19 号災害に触れながら訓練の意味について考える時間を位置づけた。また、被災当時の６年生の資料や当時の写真を掲示し、子どもたちが感じた当時の大変さや教訓を伝えた。掲示板の前に足を止めて写真を眺める児童や、防災学習に活用する学年があるなど、被災経験を風化させることなく防災意識を持続する工夫ができた。

全校集会の様子

掲示：防災コーナー

防災アドバイザー本間先生の授業

(2) 防災授業の実施

９月４日には４・５・６年生を対象に、災害時の行動やタイムライン作成のポイントなどについて授業をしていただいた。

災害に備える意識を高め、具体的な方法を考えることができた。

【６学年通信より抜粋】

４日(木)には、学校防災アドバイザーである信州大学の本間喜子先生による防災学習を行いました。台風の被害に備えて、「大学生の一人暮らし」「ペットがいる家族」「高齢者」などグループごとに決められた設定で避難の仕方や準備する物資などを想定しました。

水や食料など、どの家庭にも必要なものに加えて、「家族に連絡したほうがよい。」「ペットフードを用意しよう。」「病院に行って薬を早めにもらおう。」など、立場に応じて必要なものを子どもたちは、グループで話し合いながら考えることができました。ぜひ、ご家庭でも「自分の家族に必要なものは何なのか」を想定して「避難バック」の用意をしてみてください。(我が家は、幼児がいるのでオムツや幼児食品のストックを常備するようになりました。)

(3) 職員研修

10 月４日、本校職員を対象に、避難所開設に伴う職員の動きや、地域との連携、防災教育に有効な教材などについて資料をもとにお話しいただき、職員の防災意識向上につなげることができた。

避難所運営にあたっては、児童の安全確保・安否確認、教育活動の早期再開を最優先とした学校としての役割を改めて確認するとともに、避難所準備として、地域との事前協議を進めていかなければならないことを学んだ。

4　外部講師による防災授業の実施

(1) 低学年：「きけん、発見！」日本赤十字社

(2) 高学年：「土砂災害について」砂防ボランティア『赤牛先生』

5　事業の成果および今後の課題

(1) 成果

学校防災アドバイザー本間喜子先生の御指導を受けながら、児童及び職員が防災についての知識・理解を深めることができた。特に、引渡し訓練では、大雨による引渡し実施の判断について３校の教頭間で連絡を取り合うところから訓練として行い、職員連絡会から引渡し実施の準備へとつなげることができた。さらに、児童の引渡しを終えた後の動きとして、避難所開設準備の係会を行い、職員研修でその動きについて御指導いただくなど、３校の連携だけでなく、保護者、地域との連携を広げ、より実際の状況に合わせた訓練を行うことができた。

「安全な時に対策しておくことが強みとなる。」という本間先生の言葉にあったように、災害が心配される緊張した状況下で、「訓練の時のように待てばいいんだよ。」という声掛けができるように、有事に活かすことができる訓練を意識し、積み重ねていきたい。

各校の学校防災アドバイザーの御指導のもとに合同訓練を継続して実施できたことで、少しずつブラッシュアップしていることが大きな成果であると感じる。

(2) 課題

毎年行われる引渡し訓練や防災学習であるが、職員や児童、保護者の防災意識を持続させ、高めていくための工夫を引き続き検討していきたい。また、今年度初めて、引き渡した後の動きとして避難所開設に触れたが、係ごとの動きや連携についてイメージがもてるよう研修を重ねていきたい。

6　まとめ

本支援事業で信州大学の本間喜子先生から御指導いただき、反省点を踏まえた上で豊野地区３校による合同訓練を継続することができた。児童の命や生活を守るという最も大切な点について、専門家の御指導や、地域との連携の必要性を強く感じる。今後も引き続き、本校の防災体制や教育内容を見直す機会を大切に位置付けていきたい。

（文責　教諭　中谷　玲子）

小学校・中学校と地域の連携・協働ですすめる防災学習

― 保小中合同引渡し訓練 ―

長野市立戸隠小学校　　長野市立戸隠中学校

1　学校の概要

(1) 立地

長野市立戸隠小学校(東経 138 度 15 分 北緯 36 度 70 分 標高 910 m)

長野市立戸隠中学校(東経 138 度 05 分 北緯 36 度 41 分 標高 851 m)

(2) 地区・世帯数と戸隠管内での人口比率と市内比率

ア　地区・世帯数

町別人口及び世帯数（総括表）				
			令和7年7月1日	
町　　名	人　　口			世　　帯
	男	女	計	数
戸隠　地区計	1,448	1,468	2,916	1,396

（長野市町別人口及び世帯数　令和７年(2025 年) ７月 1 日現在より）

イ　戸隠管内での人口比率と市内比率

					令和7年7月1日
地　　区	年少人口（0～14歳）	生産年齢人口（15～64歳）	老年人口（65歳以上）	60歳以上	75歳以上
戸隠管内	170(5.8%)	1217(41.7%)	1529(52.4%)	1741(59.7%)	959(32.9%)
総合計	40220(11.2%)	208371(57.8%)	112049(31.1%)	135223(37.5%)	66567(18.5%)
（注）住民基本台帳の登録人口です。（ ）内のパーセントは各地区総人口における構成比率です。					

（長野市地区別年齢別人口　令和７年（2025 年）７月 1 日現在より）

ウ　戸隠小学校児童数 81 名（男 43 名　女 38 名）

戸隠中学校生徒数 34 名（男 17 名　女 17 名）

(3) 戸隠地区の状況

戸隠地区は、上記の表より年少人口が少なく、老年人口が多いという高齢化の傾向が見られる。また、地域の地理的特性から、「長野市ハザードマップ」（長野市総務部危機管理防災課／平成 30 年３月発行）によると、多くの地域が土砂災害警戒区域、特別警戒区域に指定されている。主要幹線道路においても、地滑りやがけ崩れのリスクが顕在化しており、災害発生時には重大な被害が想定される地域である。

こうした状況をふまえ、戸隠小学校、戸隠中学校では、児童・生徒が自らの命を守り、地域の一員として災害時にできることを考える力を育むため、防災教育に力を入れている。学校では、年間３回の避難訓練を実施しており、そのうち１回は積雪期を想定し、校庭が使えない場合の避難経路の確認も行い、また、保護者との引渡し訓練

も毎年実施している。

また、上記の理由から昨年度は地域の方も参加しての「タイムライン」の学習など学校独自だけでなく地域ぐるみで災害時に備えての学習を深めている。地域の方も学校と共に学ぶことに対して協力的に支援してくださっている。

2　本年度の実践

(1) 避難訓練ならびに引渡し訓練（写真の上４枚は小学校　下３枚は中学校）

小学校の様子

戸隠小学校では現在、校舎の改修工事が進められており、今までの避難経路が使えない状況にある。そのような中、いざという時に備え、今回は災害発生（地震）を想定した避難訓練を、保育園・小学校・中学校が合同で実施した。

特に小学生にとっては、慣れない避難経路に対する不安や戸惑いがあったかと思うが、「お・は・し」（押さない・走らない・しゃべらない）の約束をしっかり守り、落ち着いて避難する姿がとても印象的であった。真剣な表情で整然と行動する子どもたちの姿には、日頃の防災指導の成果と、確実に育まれている命への責任感、そして心の成長がにじみ出ており、私たち大人の胸を深く打つものがあった。

中学校の様子

避難後に行われた引渡し訓練では、本校のように職員数が限られている中でも安全かつスムーズに対応できるよう、看板の設置や交通整理の案内表示を工夫し、限られたスペースや職員を有効に活用した。中学校では、保護者の確認から生徒の呼び出しと引渡しまで、保護者が車に乗ったまま行えるように職員を配置した。保護者の方々も、車の動線や安全な引渡しの手順をしっかり意識してくださり、慌てることなく丁寧に御協力いただいたおかげで、大きな混乱もなく訓練を終えることができた。

(2) 防災アドバイザーからの御助言

防災アドバイザー（信州大学教育学部榊原保志特任教授）の方からは「小学校の引渡しの流れは非常によくできており、今後もこの形式を継続していくとよい」「中学校も流れができており、とてもよかった」との御助言をいただいた。その上で、実際の災害はいつどこで起こるかわからないので、時期や避難場所を変えた訓練の必要性や、様々な状況を想定した多角的な備えの大切さについても学びを深め、今後の防災対策にしっかりと活かしていく方向も大事だと示唆された。

(3) 児童・生徒の感想から

・地震の時の逃げ方も分かったし、いつもとは違う場所からだったけど安全に避難できてよかった。引渡しの時に静かに待っていられてよかった。(児童)

・訓練以外で引渡しなどやったことがないから緊張感があったけど、いざとなった時に冷静でいられるように静かに頑張った。本当に引渡しをやらないといけなくなるからその時は今日のことを思い出して頑張りたい。(児童)

・地震や土砂崩れなど、災害は起きてほしくないけど、万が一起きてしまったら、引渡し訓練で学んだことを活かして行動できるようにしておきたい。災害がおきてしまった時は、引渡し訓練の時を思い出して、落ち着いて行動しようと思いました。引渡し訓練でも真剣にやりきれたので、よかったと思いました。(児童)

・引渡し訓練の主な流れを確認できて、災害時どのように動くことが大事かわかりました。静かに早く行動することは、日常生活でもできるのでやりたいと思いました。(生徒)

・本当に地震が起こった時に、訓練をした時のように行動をできるようにしていきたいです。(児童)

・地震はいつ来るかわからないので訓練でやった行動をしたいです。(児童)

・ピリピリした緊張感の中でやった。正直いつ起こってもおかしくない地震に備えられてよかった。(生徒)

・避難訓練では、どんどん緊張感が自分のなかで薄れているように感じるし、だんだん避難の仕方も適当になってる気がするから、最高学年として、また、自分の命を守るため真剣に避難にしていきたい。引渡し訓練では、実際は、大地震のためもっと堅苦しい雰囲気のなかで親も自分も家や我が子のことを心配するような状況になってるのだと思う。もし、大地震が起きたら僕はまっさきに外に逃げると思うが、先生の指示を聞くことで地震がおさまった後の対応もできるので、先生の話をしっかり聞いて行動したい。(生徒)

・今日は、地震などの非常時を想定した引渡し訓練が行われました。今まで何度か体験してきた訓練でしたが今回も大切さを実感しました。訓練では落ち着いて行動すること、先生の指示をしっかり聞くこと、そして保護者の方と安全に合流することの大切さがわかりました。特に今回は実際に災害が起きたことを想像しながら取り組むよう意識したため、緊張感を持って参加できました。(生徒)

・災害はいつおこるか分からないし、どんな被害になるか分からないけど、今日のような訓練をしておくのは大事だと改めて感じた。訓練だけでなくて、災害のための準備をしておくのも大事だと感じた。(生徒)

(4) 事業の成果及び今後の課題とまとめ

今回のように保育園・小学校・中学校が一体となって行う避難・引渡し訓練を通じて、子どもたちの命を守るために、学校・家庭・地域がお互いに手を取り合い、共に備えていくことの大切さを改めて実感する一日となった。子どもたちを中心に、大人たちが真剣に向き合う姿こそが、未来の安心と安全を支える礎になるのだと、心から感じている。

（文責　戸隠小学校　教諭　新井　清規　　戸隠中学校　教頭　北村　聡）

豊野中学校における防災教育の充実に向けた取組について

― 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 ―

長野市立豊野中学校

1　はじめに

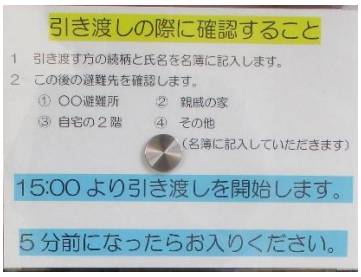
長野市の北部に位置する豊野中学校は、創立 69 周年を迎えた生徒数 235 名の中規模校である。豊野町は戸隠山麓を源とする鳥居川が町の東西を二分して流れ、飯縄山山中から流れ出る浅川が南部を縦断して千曲川に合流していく。郊外はりんごやぶどうの生産が盛んに行われている。豊かな自然に囲まれている豊野町だが、上記にある鳥居川・浅川・千曲川に囲まれているので、昔から水害とは切り離せない環境にある。6 年前の令和元年 10 月の台風 19 号の水害で豊野町、そして豊野中学校は大きな被害を受けた。豊野中学校校舎の１階部分は 1.5ｍもの浸水被害を受け、１階部分が水没した。また、水害に遭った多くの家庭の生徒は豊野西小学校等の避難所で過ごしながら通学した。その後、豊野中学校では仮設校舎での学校生活、令和３年に１階部分の校舎改修を経て、現在に至っている。

2　長野市立豊野中学校の防災体制について（概要）

(1) 豊野３校合同引渡し訓練について

令和元年台風 19 号の被害後、自校の危機管理マニュアルの確認や、毎年改善すべき部分について見直しを行った。その後、令和３年度から豊野３校（豊野西小・豊野東小・豊野中）が連携した防災教育の充実を位置づけ、令和４年度からは豊野３校合同引渡し訓練に取り組み、今年で４年目になった。

今年度は８月 29 日に豊野３校合同引渡し訓練を行った。引渡しを迅速に行えるように、入口を２つにして人の出入り集中を防いだり、保護者だけで行動できるように案内板・コーンスタンド・順路などの表示を配置したりするなどの工夫をした。



(2) 防災教育について

年に２時間、10 月に全校一斉に防災教育の時間を設け、３年間を通して使用する教科書に沿って、学年ごとに単元を決めて学習を進めてきた。授業は主に担任が担当したが、防災についての知識や被災を体験したことのない教師が実際に被災体験のある生

徒に教えることの困難さや授業をする内容として教科書以上のことがなかなか難しい等の様々な課題があった。

3　学校防災アドバイザーの関わり

信州大学教育学部社会科学教育講座の廣内大助教授からは豊野３校合同引渡し訓練についての御助言をいただいた。また、国立研究開発法人土木研究所主任研究員の傳田正利先生からは教育版マインクラフトを使った防災教育の取組についての御助言をいただいた。

(1) 豊野３校合同引渡し訓練について

今年度は８月 29 日（金）に実施した。

廣内先生からは、以下のアドバイスをいただいた。

・昨年度よりも改善されてずいぶんよくなっている。全体としてよい訓練だった。まずい点はない。
・教室縮小の意味（人手を生み出す）がわかってやっていた。
・駐車場は掲示がされていてスムーズだった。人手の節約もよかった。
・巡視の手順（ドアを開ける、声をかける）どのように見回りをするか統一する必要がある。
・早退した生徒の確認、行方不明者を出さない工夫をすること。
・トランシーバーの使い方について確認したい。どんなときに使うのか。
・引き渡すときの手順をしっかりすること。
・豊野中のタイムラインの確認をすること。
・子どもたちは実際のときは不安だと思うので、リラックスして待てるように、読書をしたり宿題をしたりするように積極的に声をかける。
・昨年度は学校に近い生徒は帰したが、豊野中学校としての線引きが必要。
・数年に１回は 10 月近くに行った方がよい。
・来年度は生徒を引き渡した後、職員がどう動くのかの訓練をしたらどうか。　等

(2) 防災教育の取組について

６月 19 日の学校安全総合支援事業説明会の際に、傳田先生から教育版マインクラフトを使った防災教育の説明があった。本校防災担当として興味をもったので、翌週には傳田先生宛てにメールを送り、２学期に行う防災教育で教育版マインクラフトを使った授業を行うことができないか相談した。

その後、７月 15 日には傳田先生に豊野中学校に来ていただき、防災学習の授業内容について相談を行った。その後も傳田先生とはメールでのやり取りを中心に情報交換

を行い、９月にも２回豊野中に来ていただいて、防災授業の準備を進めた。

今回授業を行うにあたって、ゲームを使った防災学習という貴重な機会なので、できるだけ多くの生徒が体験できる機会を考え、授業当日には、傳田先生以外にも、信州大学の木戸先生、三和先生、土木研究所の山下研究員に授業をお願いし、４名の先生にそれぞれの教室に入っていただき、全校生徒を対象に授業を行った。

10 月３日には、１クラスで先行して事前授業を行い、いくつかの改善点を修正したのち、10 月 16 日と 31 日の２時間に渡って防災学習の授業を行った。

10 月 16 日（木） 第１時	「仮想世界に自分たちの豊野町を作ろう！」 各教室にて実施（大学の先生が各教室に入って指導する） ・全体への説明（５分） ・教育版マインクラフトをインストールする（20 分） ・グループに分かれて豊野町をつくる（20 分） （クラスごとに自分たちの豊野町をつくる） ・感想等の記入（５分）31 日までの期間で豊野町の作り込みを行うことも可能
10 月 31 日（金） 第２時	「仮想洪水体験システムで仮想避難訓練をしよう！」 ～仮想の豊野町での洪水から逃げる体験で未来の防災をつくるチカラをみがこう！～ 各教室にて実施（前回同様、大学の先生が各教室に入る） ・全体への説明（５分） ・【洪水１】教育版マインクラフトで避難行動をする ・避難行動①の振り返り ・【洪水２】避難行動①を生かして、もう一度避難行動をする ・避難行動②の振り返り・活動のまとめ ・感想等の記入・全体への共有（５分）

4　事業の成果及び今後の課題

(1) 豊野３校合同引渡し訓練について

引渡し訓練については修正を重ねながら、年々改善してきた。

来年度以降に向けて、巡視の手順、トランシーバーの使用法、引渡し手順の徹底、タイムライン、生徒を引き渡した後の職員の動き等の確認を進めていきたい。

(2) 防災教育の取組について

今年度、初めて教育版マインクラフトを使った防災教育を全校で行ってみた。

成果としては、生徒が興味をもって主体的に学習に取り組んだ点がある。今までの防災学習は、生徒が受け身になって学習していたが、今回ゲームを使った防災学習をすることで、生徒は興味をもって自ら主体的に学習に取り組む姿が見られた。

一方、課題としては、ゲームをインストールする際に教育委員会に許可が必要なこと、実際に授業が始まってしまうとなかなか指示が通らず、始める前に注意事項を伝えておくこと、授業以外の時間にゲームをする生徒が出てしまう等があった。

また、来年度以降の防災学習のことを考えると、教育版マインクラフトを使った防災学習を毎年行うことは難しく、３年に１回が妥当であると考える。

授業後の生徒の感想

・私たちが住んでいる豊野町には洪水の危険があるということを改めて感じた。

・ゲームでは気がついたら水が来ていて、実際にはもっと早く水が来てしまうのかなと思い、怖くなりました。その怖さで逃げる、逃げないの判断が難しくなってしまうのかなと思いました。万が一のために、家族でハザードマップを確認したいです。

・ゲーム内で実際に洪水が起きて、逃げる体験をしました。ゲーム内での洪水なのに、水が見えると焦ってしまい、うまく操作できませんでした。だから、もし私の目の前に洪水が来たら、落ち着いて複数で高い場所に避難することを心がけたいです。

5　まとめ

今回、傳田先生の御協力のもと、教育版マインクラフトを使った防災学習を行った。課題等もあったが、生徒たちが意欲的に学習に取り組む姿が見られた。その姿が見られたことが、何よりの成果だと感じた。これから改善する点も多くあるが、傳田先生をはじめ多くの先生方の御協力があって、このような授業を行えたことに感謝したい。

（文責　教諭　中村　明史）